

かささぎ通信 第53号

2017年2月10日 発行

どなたでもいつの会でも参加できます

森三郎刈谷市民の会

「森三郎の作品を読む会」

二〇一七年一月の「森三郎の作品を読む会」では、『赤い鳥』昭和10年

2月号「母さん」、4月号「けんか」、5月号「牛公」

(いずれも初出作品、森三郎名義) を読みました。

2月号の「母さん(童話)」は、病気になって寝込んだ母さんのことを案じながら、学校で授業を受けている栄吉の不安な気持ちを綴った話です。

三時間目の自習時間に、ぼんやり家のことを考えている栄吉の前の席で、津村と長谷川は小競り合いをしています。その果てに、津村は顔を引つかかれてみみずばれができません。津村は、家の人に誰かとけんかをしたのか問われても、「ちがはい。けんかじゃない。」と否定します。津村の答えからは、口げんかも遊びのうち、大人に入られたくないという子どもたちの日常が感じられます。一方、母さんのために津村の家に牛乳を買いに行つた栄吉は、自分がけんかの相手と誤解されていることを感じながら、母さんが直つたのだから、かまやしない、と強がってみせます。

「母さん」を直接描くのではなく、母さんを思い、不安、緊張、安堵の栄吉の一日を描くことによつて、母さんと栄吉の常日頃の親子のつながりを感じさせる作品になっています。

4月号の「けんか(童話)」は兄弟げんかの話です。万年筆を買ってほしい兄の和雄は、「だれだつてもつてるの。もつてないのはほくも入れてたつた二人なの」と母さんに言います。でも弟の茂が、みんな持つてるなんてうそだと、兄の邪魔をします。物を買ってもらいたい時の口実がいつの時代も同じです。当時の読者の子どたちにも心当たりがありそうな話だつたことでしょう。

5月号の「牛公(童話)」も同級生同士の言い争いが話材です。しかし、先の二か月の作品の様に子どもたちの日常によくあるけんかのシーンを描いていると、笑っていられるわけでもありません。

「牛公」というのは、幸一たちと同級の男の子のあだ名です。幸一たちと同じ六年生だけれど、年は三つも上で、体がずば抜けて大きいので、「牛公」と呼ばれています。幸一の家の近くの乾物屋に奉公している「小僧」さんで、学校へは月のうち半分も出席しません。春季皇霊祭の日(春分の日)の皇室の行事の日には学校で紅白まんじゅうが配られますが、その日久しぶりに牛公が登校したので、幸一に「おまんじゅうがほしくて学校へ来たんだろう」とからかわれます。でも牛公は言われればなしではなく、幸一に言い返したりしています。

森三郎さんは幸一の立場、牛公の立場どちらにも立たず、二人に思いつきり言い合いをさせています。実は牛公の登校に初めに気づいたのは幸一の友だち寺田君でしたが、幸一がからかうのを「よしてやれよ。かわいそうだから」と、やめさせようとしています。

これまでも昭和9年3月号の「角兵衛獅子」で、角兵衛獅子の子どもたちのことを「かわいそうだな」と思いながら、一緒にいた同級生との口げんかを黙って見ていた少年がいました(「かささぎ通信」第41号「参照」)。寺田君は一步進んで、「よしてやれよ」と言っています。この寺田君の立場が森三郎さんの視線なのではないでしょうか。

この話の中では牛公が学校へ来ない理由を「学校が大きらいで」と書かれています。幸一が母さんに言われて朝、乾物屋へ海苔を買いに行く、牛公が箒で店の前を掃いています。読者の子どもたちは、牛公があまり学校へ来ない理由を感じ取っていたらどうと思います。そういう境遇の子どもたちがいた時代だつたことを感じさせる作品でした。

次回予定 平成29年3月10日(金)午後1時〜3時

『赤い鳥』昭和10年12月号「あゝ眠い」

昭和11年1月号「玉や」、8月号「病氣」